

## ～盲導犬を伴った視覚障害者の駅利用の安全確保について～

平成 28 年 8 月 19 日

公益財団法人 日本補助犬協会

代表理事 朴 善 子

銀座線ホームで、盲導犬を伴った視覚障害の方が線路に転落するという痛ましい事故がおきました。今も当協会には、鉄道事業者やマスコミ関係者の方から多くのお問い合わせ(原因と今後の対策など)をいただいております。二度とこの度のような事故が起きないように、当協会の見解を述べさせていただきます。

視覚障害者にとって、駅ホームは「欄干のない橋」といわれる危険な場所です。盲導犬を伴うことによって、その危険を低減することはできますが完全ではありません。

盲導犬と共にホームを移動する場合、転落防止の為、ホーム線路側を盲導犬が歩行することが原則です。しかし、階段や出口の位置関係によっては、人がホーム線路側を歩くことがあります。ホーム中央部分には、柱、売店、椅子の他、電車を待つ人々などの障害物が多く、ホーム線路側しか歩行空間が確保できない場合もあります。また、障害物を避けているうちに、方向が分からなくなる事もあり、特に、地下鉄などの音が反響する構造では、自分の位置が判断しにくく、誤った判断を誘発するという危険が増します。

今回の転落事故では、駅員も含め周囲の人々が緊急時の具体的な対応が分からず、危険を視覚障害者に伝えられなかった可能性があります。視覚障害者の場合、流れているアナウンスや声掛けが、自分に対して話しているかが判断しづらい事も多いことから、「盲導犬を連れた方（お客様）」あるいは「白状を持っている方（お客様）」と、声をかけ、その方に対して呼びかけていることが伝わるようにすること。また、今回のように危険が迫っている場合には、「危ない」等ではなく、具体的な内容、「止まってください！」と呼びかけ、まず、危険な行動の回避をしなければなりません。緊急時の研修を受けていない社員が、とっさに的確な危険回避行動をとることは、難しいと言わざるを得ません。

また、「盲導犬を伴っていればそのユーザー(使用者)の安全は確保されている」との思い込みが、緊急時の対応を遅らせる原因となります。盲導犬を伴っていても、そのユーザーが安全に歩行されているかどうかを周りの方が見ていただき、手助けが必要な場合は直ぐ

に声掛けができるよう、温かい見守りをお願いいたします。補助犬(盲導犬・聴導犬・介助犬)を伴った人達も、サポートが必要であるということを再認識していただけますよう、お願い申し上げます。

以上の観点から、盲導犬ユーザーを含む視覚障害者、補助犬ユーザーの駅構内の安全を確保するため、以下2件の推進を強く願う次第です。

- 1 根本的な安全対策として、ホームドアの設置
- 2 交通事業者社員に向け、盲導犬を含む補助犬接遇研修の導入

以 上